熊本県文化財調査報告第 215 集

岩倉山中腹遺跡

熊本市八景水谷２丁目 17 番１号所在遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書

２００３年３月

熊本県教育委員会

序　文

熊本県教育委員会では、本年度に陸上自衛隊北熊本駐屯地警衛所建設工事に伴い、熊本市八景水谷に所在する岩倉山中腹遺跡の発掘調査を実施しました。

僅かな調査面積ではありましたが、住居跡をはじめとして、縄文時代や弥生時代の土器・石器など、当時の人々の生活を窺うことのできる遺物が多数出土し、この遺跡の重要性を確認できました。

これらの調査結果が学術的資料としてはもとより、広く皆様方に活用されるとともに、埋蔵文化財保護への理解を深めていただくための資料となれば幸いです。

最後になりますが、発掘調査にご協力いただいた陸上自衛隊北熊本駐屯地業務隊、熊本防衛施設支局、並びに関係機関、地元の方々に厚くお礼申しあげます。

平成15年３月31日

熊本県教育長　　田　中　力　男

例　　言

1　本書は熊本県教育委員会が平成14年度に発掘調査を行った岩倉山中腹遺跡の報告書である。
2　熊本防衛施設支局の依頼により、熊本県教育委員会が実施した。
3　遺構の実測は米村　大、坂田和弘、上高原聡が、遺物のうち土器の実測は井島秀子、宮崎典子、井上裕美、坂本貴美子、山田友子、渡辺いわ子、府内博子、西　慶喜が行った。石器の実測は㈱九州文化財研究所に委託した。
4　浄書は遺構を西村和美、戸田紀美子が、遺物のうち土器を清水千郷、浜崎清子、石器を平川恵理子、坂田が行った。
5　掲載写真は遺構を米村が、遺物を村田百合子、米村が撮影した。
6　本書に使用した地形図は国土交通省国土地理院発行の25,000分の１地形図『熊本』である。
7　本書の執筆はⅠ・Ⅲ章を坂田が、Ⅱ章、Ⅳ章、Ⅴ章を米村が執筆した。
8　本書で使用した図面・写真・遺物は熊本県教育庁文化課文化財資料室で保管する。
9　本書の編集は坂田の指導のもと、米村が行った。

凡　　例

1　岩倉山遺跡の調査区は、警衛所及び付帯施設と配管部分の試掘坑からなる。
2　試掘坑は、東から順に№１～３と設定し、「№１トレンチ」のように表記した。
3　遺構番号は、遺構の種別ごとに付け、住居跡は「SI」、不明遺構は「SX」と表記した。
4　標高は既設座標の標高を基準とし、その派生杭に置いた値を基にしている。
5　基本層序はローマ数字（Ⅰ～Ⅵ）で、遺構覆土はアラビア数字（1, 2, ‥）で表記した。
6　遺構・遺物図の縮尺は、遺構は1/20または1/40、遺物は1/2 とし、図版ごとに縮尺を示した。
7　遺構図のスクリーントーンの指示は以下の通りである。

：炭化物

本文目次

序文
例言
凡例

第１章　はじめに
　第１節　調査にいたる経緯……1
　第２節　調査体制……1
第２章　遺跡の位置と環境
　第１節　地理的環境……2
　第２節　歴史的環境……2・3
第３章　調査の方法と経過
　第１節　調査の方法……6
　第２節　基本層序……6
　第３節　調査の経過……7
第４章　調査の成果
　第１節　遺構……9
　第２節　遺物……9・12・15
第５章　まとめ……20

遺物観察表
参考文献
写真図版

挿図目次

第１図　周辺遺跡地図……4
第２図　土層模式図……6
第３図　調査区位置図……8
第４図　遺構配置図……8
第５図　SI－01実測図……10
第６図　SI－02実測図（No.2トレンチ内）……11
第７図　SX－01実測図……11
第８図　SI－01出土遺物実測図……13
第９図　SI－02出土遺物実測図……13
第10図　SX－01出土遺物実測図（１）……13
第11図　SX－01出土遺物実測図（２）……14
第12図　包含層出土遺物実測図（１）……14
第13図　包含層出土遺物実測図（２）……16

第14図　包含層出土遺物実測図（３）……17
第15図　包含層出土遺物実測図（４）……18
第16図　包含層出土遺物実測図（５）……19

表目次

第１表　周辺遺跡地名表……5
第２表　調査工程表……7
第３表　出土遺物観察表（１）……21
第４表　出土遺物観察表（２）……22
第５表　出土遺物観察表（３）……22

図版目次

図版１－（１）SI －01遺物出土状況 ……25
－（２）SI －01炉跡・柱穴検出状況 ……25
－（３）SI －01完掘状況 ……25
－（４）SI －02完掘状況 ……25
図版２－（５）SI －01検出状況 ……26
－（６）SI －01Pit.2半裁状況 ……26
－（７）SI －01炉跡検出状況 ……26
－（８）SX －01遺物出土状況 ……26
－（９）完掘状況（全景）……26
図版３－（10）SI －01・SX －01出土遺物 ……27
－（11）SX －01出土遺物 ……27
図版４－（12）包含層出土縄文土器……28
－（13）包含層出土縄文土器……28
図版５－（14）包含層出土弥生土器……29
－（15）包含層出土縄文土器（底部）……29
－（16）出土石器（石鏃、剥片）……29
－（17）出土石器（石核）……29
－（18）出土石器（石匙、石包丁）……29
－（19）出土石器（打製石斧）……29

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査にいたる経緯

熊本県教育庁文化課は、平成13年11月30日付け教文第1799号で陸上自衛隊西部方面総監部へ平成14年度以降の事業照会をおこなった。それに対し、平成14年１月18日付け西方施第16号で回答があり、健軍駐屯地、高遊原航空隊、北熊本駐屯の各所あわせて５箇所が予定地としてあげられていた。なかでも北熊本駐屯地では三ヶ所と多かった。それらの工事予定個所について逐次遺跡地図との照合をし、現地踏査を行った結果、確認調査が必要の旨を平成14年３月26日付け教文第2691号で通知した。

それを受け、平成14年４月８日付け北熊本駐業第493号で自衛隊北熊本駐屯地から試掘確認調査の依頼があった。平成14年５月７日、現地で確認調査を行った。その結果、三ヶ所の工事予定個所のうち警衛所建設予定地から弥生時代中期、縄文時代晩期の良好な包含層及び遺構を確認した。その調査結果をまとめ、平成14年５月21日付け教文第457号により遺跡の存在を確認したことと、そのため工事に先立ち埋蔵文化財の発掘調査が必要な旨通知した。

その後、陸上自衛隊西部方面総監部から発掘調査については熊本県教育委員会文化課に委託したいとの申し出があったので協議をもった。当初県文化課は平成15年度事業として、本調査を行う予定で協議していたが、自衛隊側と予算執行上の違い等により次年度調査にはいるための条件が整わなかった。最終的には熊本県教育委員会文化課が平成14年度内で発掘調査に対応することとし、自衛隊側では予算を獲得に動くといくことで協議が整った。ただ、自衛隊側の予算が、事業を推進する部署につくのか、北熊本熊駐屯地に付くのか補正予算の計上時期には明確でなかったために、本調査が確実に行えるのかどうか不明確であった。最終的には自衛隊側での予算獲得ができ、熊本防衛施設支局が対応することがはっきりしたため、12月補正予算案の中に北熊本駐屯地警衛所建設工事に伴う発掘調査の名目で受託経費として計上した。

その後、平成14年11月28日付け施熊第1464号で熊本防衛施設支局から文化財保護法第57条の３に基づく発掘の通知がなされ、熊本県教育長からの発掘調査の指示の後、平成15年１月６日付け施熊第１号で契約協議を行い、同日付け教文第2348-1号で「平成14年度北熊本（14）警衛所建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査」として、熊本防衛施設支局と受託契約を締結した。事前準備を行い、平成15年１月10日付け教文第2434号で発掘調査の通知を行い、平成15年１月14日に本調査にはいった。

第２節　調査体制

発掘調査及び整理報告書作成（平成14年度）

調査主体	熊本県教育委員会
調査責任者	成瀬烈大（文化課長）
	島津義昭（教育審議員課長補佐）
調査事務局	小田信也（教育審議員課長補佐）
	中村幸宏（主幹・総務係長）
	天野寿久（主任主事）
	杉村輝彦（主事）
調査総括	高木正文（主幹･文化財調査第１係長）
調査担当	米村　大（調査員現場調査･報告書作成）
	坂田和弘（調査員現場調査）
調査協力	陸上自衛隊西部方面総監府、 北熊本駐屯地施設部管理班、 熊本防衛施設支局

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

熊本市清水町兎谷八景水谷にある立田山山系、岩倉山（標高115.7m）の北～西斜面に広がる遺跡である。本調査区は弾薬庫地区内にあり、周辺は宅地化される。陸上自衛隊北熊本駐屯地のある北西側の丘陵は井芹・坪井・白川などにより火砕流台地（阿蘇－４）の侵食によって形成される河岸段丘へと続く。また、熊本市北部の清水町楡木付近～御坊山付近までの約15km の間に立田断層が走る。周辺は北西方向に合志台地、南側に同じ立田山系の天拝山の間の谷を埋め立てて造成されている熊本北高校があり、この谷より兎谷川が西方向に流れている。約1.5km 後方に白川、西側２ km に坪井川が存在する。坪井川に注ぐ瀬田上井手（堀川）は近世に白川から取水する灌漑用水路として開削される。

一帯の地質は阿蘇溶結凝灰岩（阿蘇４火砕流）を基底とし、上層に阿蘇４風化層、洪積世堆積層、沖積世堆積層をのせている。

第２節　歴史的環境

岩倉山中腹遺跡の範囲は岩倉山北～西斜面そして陸上自衛隊北熊本駐屯地の一部までを含む（第１図－NO.1）北バイパスの建設に伴いの北側斜面地において甕棺墓が出土している。岩倉山に位置する遺跡は本遺跡以外に岩倉山山頂遺跡・岩倉山遺跡が存在する。周辺では楡木遺跡、堂ノ前遺跡、庵ノ前遺跡、古閑山遺跡、天拝山遺跡、迫ノ上遺跡、緑ヶ丘遺跡などがあり本遺跡と同様に縄文時代の遺跡が多く見受けられる。ここでは、第１図　周辺遺跡分布図及び第１表　周辺遺跡地名表において、本遺跡と共通する縄文・弥生時代を中心とし、周辺の主な遺跡について述べたい。

(1) 旧石器時代

白川流域の河岸段丘上には石の本遺跡、柴山遺跡、健軍神社周辺遺跡群、龍田陣内遺跡、新南部遺跡、迫ノ上遺跡、谷口遺跡がある。立田山麓一帯では天拝山Ａ遺跡に尖頭器、楡木遺跡から細石刃核、また龍田陣内遺跡・谷口遺跡では三稜尖頭器が出土している。平成５年、北バイパス建設に伴う調査でも三稜尖頭器が確認されている。

(2) 縄文時代

岩倉山周辺には北バイパス建設に伴い、平成３年度～７年度に調査された庵ノ前、迫ノ上、古閑山遺跡がある。庵ノ前遺跡では以前の調査で縄文時代早期の竪穴住居跡４軒が県下で初めて確認される。近年の調査では早期～晩期までの土器・石器が出土している。迫ノ上遺跡では早期の集石遺構、晩期の住居跡、埋甕がみられる。

立田山一帯では楡木遺跡を始め、押型文土器が出土する地点が多数認められる。

熊本市内において遺跡の分布から、旧北部町内の台地上に散在する一群、白川の河岸段丘から背後の台地上に立地する一群、託麻原台地南端の湧水に面した一群の３群に分かれる。この中で岩倉山中腹遺跡は白川の河岸段丘から背後の台地の一群に類する。

白川北岸では縄文早期から晩期までの遺物が出土するカブト山遺跡や縄文前期の曽畑式土器が多く出土した龍田陣内遺跡がある。また竹ノ後遺跡では縄文後期の御領式土器が出土し、石囲みの遺構、土偶がみられる。

白川南岸を眺めれば、河岸段丘の後背地は平坦であり北岸に比べ大規模な遺跡が広がる。縄文早～晩期までの土器が多量に採取された新南部遺跡群は広範囲に及び、対岸にカブト山、龍田陣内遺跡がある。多量の土偶が出土した上南部遺跡は竹ノ後遺跡の対岸に位置する。後期を中心とする遺跡であり、竪穴住居跡や配石遺構が検出される。後期の鐘崎式土器が出土した渡鹿貝塚、後期中葉の標式遺跡となった北久根山遺跡などがみられる。

(3) 弥生時代

岩倉山では住宅団地造成の際、甕棺が多数出土し

ており、庵ノ前遺跡では弥生時代中期の竪穴住居跡２軒、甕棺墓12基・土壙墓９基が確認されている。迫ノ上遺跡では昭和35年に人骨を伴う須玖式の合口甕棺が発見され、古閑山遺跡・楡の木遺跡でも中期の甕棺が出土している。この他、立田山周辺には中期の標式遺跡である黒髪町遺跡をはじめ、竹ノ後遺跡、中牧鵜遺跡など多数の遺跡が存在する。坪井川を挟む谷の周囲に広がる清水遺跡群には八景水谷遺跡・楢山遺跡が含まれる。八景水谷遺跡では昭和30・43年に甕棺が発見され、平成４年に熊本市教育委員会により竪穴住居跡が調査される。楢山Ａ遺跡は昭和33年、尚絅高校考古学クラブにより調査がなされ、100基以上の甕棺が存在していた可能性が考えられている。

(4) 古墳時代

岩倉山周辺にはこれまで庵ノ前遺跡、古閑山遺跡、迫ノ上遺跡において住居址、墓地が確認されている。

古墳は立田山南麓の黒髪地区に集中し、横穴墓はさらに広い地域に点在する。黒髪地区には小型の円墳である長薫寺古墳、立田山南麓古墳、宇留毛神社境内古墳がみられる。横穴墓は弓削小坂遺横穴墓群、女瀬平横穴墓群、長薫寺横穴墓群、浦山横穴墓群、つつじヶ丘横穴墓群、小碩橋際横穴墓群などがある。

特につつじヶ丘横穴墓群は未開口のものが多く、墓前祭祀の様子がわかる好資料として注目され、県指定文化財になっている。

(5) 歴史時代

古代律令制度のもと肥後国の行政区分は白川を境にして熊本市北部を飽田郡、南部を託麻郡に分けられる。飽田郡家は京町付近、託麻郡家は渡鹿付近や神水付近に想定されている。立田山西麓を官道（西海道）が通り、現在の子飼に蚕養駅が設置されたと推定されている。最近、熊本大学構内の発掘調査にて「国」銘のある土製印や「馬」の字が書かれた多量のヘラ書や墨書土器、円面硯が出土している。遺構では、規格性をもつ掘立柱建物、規模の大きい建物が推定される柱穴などから蚕養駅家との関連が考えられている。

立田山東部では須恵器の生産跡である長連寺窯跡や堂の前屋敷窯跡がある。

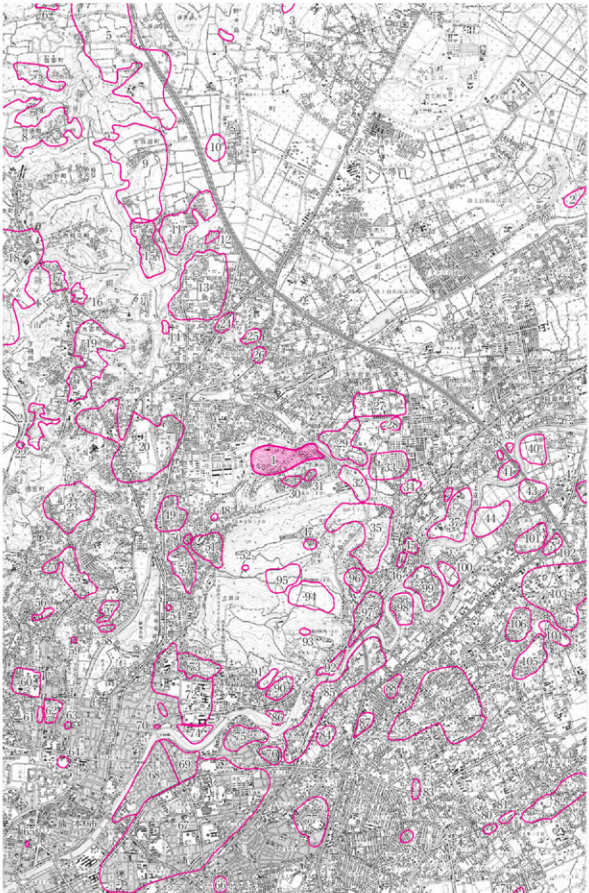
中世、立田山南麓に立田山城跡、平成13年に北バイパスに伴い調査が行われた須屋城跡がみられるが集落は白川、坪井川の沿岸部にあり台地上は未開発であった。

近世になると、肥後藩によって、台地上の開拓が行われ現在の清水町、立田町一帯は五町手長に属し、細川忠利は麻生田、楡木、兎谷などに地筒をおいて、開拓と防御の任にあたらせている。

現在の遺跡周辺は、熊本市域の拡大に伴う農地の宅地化が進み、また、造成によって旧地形が削られるなど、急速に昔の面影を失いつつある。

（参考文献）

『熊本市北部地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会　1969
『熊本市東部地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会　1971
富田紘一「鳥井原遺跡発掘調査報告書」熊本市教育委員会　1977
富田紘一「上南部遺跡発掘調査報告書」熊本市教育委員会　1981
平岡勝昭「新南部・潤野遺跡」熊本県教育委員会　1986
『日本地名大辞典43熊本県』角川書店　1987
平井浩一他「龍田陣内遺跡」熊本県教育委員会　1988
大田幸博他「庵ノ前遺跡Ⅰ・Ⅱ」熊本県教育委員会　1991
「新熊本市史史料編第１巻考古史料」新熊本市史編纂委員会　1996
浜田彰久「庵ノ前遺跡Ⅲ」熊本県教育委員会　1997
「新熊本市史史料編第１巻通史編」新熊本市史編纂委員会　1998
浜田彰久「迫ノ上遺跡」熊本県教育委員会　1999
浜田彰久「古閑山遺跡」熊本県教育委員会　1999
美濃口雅郎「つつじヶ丘横穴墓群」熊本市教育委員会　2002



0　　2km

第１図　周辺遺跡地図（１／50,000）

第１表　周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	備考
1	岩倉山古墳	熊本市清水町荒子	縄文・弥生
2	鳥高山	菊池郡合志町植栗鳥高	弥生
3	野出原	菊池郡西合志町野々島野出原	
4	丸乃内	菊池郡西合志町野々島丸乃内	
5	立石遺跡	熊本市改寺町	縄文後期、磨製石斧、土師器
6	植木雲雀	熊本郡植木町広住向原	
7	須川原	熊本市改寺町	
8	小赤山遺跡群	熊本市小赤山居原地	
9	大島山遺跡群	熊本郡大島町赤坂ノ本	土師器
10	木原野Ａ・Ｂ	菊池郡西合志町野々島木原野	縄文土器・石鏃
11	梶尾古墳郡・宮原敷	熊本市梶尾町宮原敷	
12	梶尾ノ野	熊本市梶尾町ノ野	
13	横宮山	熊本市横宮山町	横ノ原遺跡・垣ノ外遺跡も含む
14	山西郡	熊本市横宮山西郡郷	
15	梶尾遺跡群	熊本市梶尾町中尾原	弥生後期
16	四方唐御馬下	熊本市四方唐町御馬下	縄文・土師
17	四方唐	熊本市四方唐町	縄文後・晩期の集落
18	保田遺跡群	熊本市保田ノ下尾田町	
19	熊田遺跡群	熊本市熊田町荒ノ木	縄文後期
20	清水町遺跡群	熊本市清水町宮原	弥相墓群、縄文土器、土師器
21	原下遺跡	熊本市下程山町南原木田・鳴山	弥相・土師器・須恵器
22	竹木	熊本市竹程台上	弥相
23	赤土	熊本市赤土町	後、道路、土師器、須恵器
24	宮の前	熊本市西合志町須屋宮の前	縄文・古墳・弥相、住居跡
25	柴の木	熊本市西合志町須屋柴の木	縄文・古墳・弥相、土師器
26	向島	熊本市西合志町須屋向島	須恵器・弥相
27	梅北山	熊本市梅北山・梅北ノ丁目	縄文後
28	梅	熊本市梅ノ丁目	縄文晩期
29	塩本	熊本市塩の本	縄文、弥相墓群
30	岩倉山	熊本市清水町荒谷	
31	岩倉山山田	熊本市清水町荒谷	
32	城ノ原	熊本市清水町荒谷	旧石器、縄文、弥生、古墳
33	宮の前遺跡群	熊本市塩の本・麻田町	弥生・古代・弥相、溝跡
34	宗町橋	熊本市清水町塩の本・町橋	土師器
35	武ノ上	熊本市麻田町神内	縄文、弥生、弥相墓群
36	立ノ平	熊本市麻田町上立田	
37	竹の尾・西板遺跡群	熊本市麻田町上立田・弓削	竹の尾：縄文・弥生：土錘、弥相
38	弓削平の下・Ａ	熊本市麻田町麻田弓削平の下	弥生
39	弓削平の下・Ｂ	熊本市麻田町麻田弓削平の下	横穴式石室
40	古城	熊本市古閑町殿山	縄文後・晩期、弥生後期、土師器、須恵器
41	天塚瀬	熊本市麻田町神内麻生瀬	縄文後・晩期土器、土師器
42	右原瀬ヶ井	熊本市右原町瀬ヶ井	縄文晩期
43	本上遺跡群	熊本市右原町中	縄文・古代：縄文土器、布目瓦
44	上南原	熊本市上南原町村下	縄文：土錘、後晩期製作
45	宮原前	熊本市麻田町上立田	粕武石器
46	二ノ宮（牧橋宮脇）	熊本市麻田町上立田	縄文晩期
47	天狗山	熊本市麻田町上立田	縄文・弥生：縄文土器、弥相
48	立石原梨子地蔵前	熊本市清水町立石	
49	亀井遺跡群	熊本市清水町亀井	縄文・中世：板碑天文２年銘、土師器、瓦器
50	古閑前	熊本市清水町亀井・清水本町	旧石器
51	清水町谷口	熊本市清水町谷口	旧石器：ナイフ型石器
52	万石東横	熊本市東横ヶ丘	
53	石城遺跡群	熊本市清水町・清水万石３丁目	弥生・中世・近世：墓相、松崎雲山大神跡
54	宝塚	熊本市宝塚町	
55	南田山沢塚遺跡群	熊本市南田ノ２・３丁目、高平１丁目、津浦町	旧氏族：弥生土器、土師器／鬼道石柱；鏡・鉄剣／長道；横穴式石室
56	南田原	熊本市南田１丁目	南田小学校校庭弥相
57	打越	熊本市清水町打越	弥生
58	打越川端	熊本市清水町打越	縄文：北久根山式、石斧
59	桑畑	熊本市津浦町	
60	京町古遺跡群	熊本市京町	縄文後期
61	京町２丁目	熊本市京町２丁目	
62	石久保谷	熊本市京町２丁目	石天道方跡を含む
63	内坪井	熊本市内坪井町・釜川１丁目	弥生
64	薬師中学校校庭	熊本市千原城町	弥生・墓相墓群
65	千原町	熊本市京町町	縄文
66	西水前寺	熊本市水前寺１丁目	
67	大江遺跡群	熊本市大江２・６丁目、新大江１・２丁目、大江本町ほか	縄文・古代：土錘、土師・須恵器、瓦など
68	新屋敷	熊本市新屋敷１・３丁目	弥生・中世：渡道集落、陶磁器
69	大江台川	熊本市大江１丁目	縄文中・前期、弥生：墓相
70	子飼	熊本市子飼本町	縄文後期
71	七軒町	熊本市子飼本町	縄文
72	黒髪町遺跡群	熊本市黒髪５・７丁目	縄文・弥生・古代：墓相墓群、住居跡（古代）、瓦など
73	小峰	熊本市黒髪３・５丁目	縄文・弥生：墓相
74	上河原	熊本市黒髪２丁目	縄文
75	武蔵遺跡群	熊本市武蔵５・６丁目	武蔵団塊：縄文中・後期／北原：墓相、板碑群海蔵天文16銘
76	辻	熊本市辻町２丁目	縄文土器、須恵土器
77	雲山遺跡群	熊本市雲山１・２丁目	縄文・古代：布目瓦
78	一新城	熊本市一新５丁目	石器
79	在十原	熊本市桜町	縄文・古墳
80	新外Ａ	熊本市新外２丁目	縄文後期
81	新外Ｂ	熊本市小峰１丁目	須恵式墓相
82	小屋	熊本市小峰１・２丁目	鐵滓跡
83	保田窪東・本松	熊本市窪田６・７丁目	縄文
84	新南部・西原	熊本市武蔵９丁目、保田窪本町	縄文・弥生
85	新外原遺跡群	熊本市新南部５・６丁目、貢蔵８・９丁目ほか	縄文：後期の集落
86	下前田Ｂ・Ｅ	熊本市黒髪６丁目	
87	西原	熊本市西原１丁目	縄文：禅智文土器
88	上宮武堀田地	熊本市西原２丁目	縄文：禅智文・被覆式土器
89	宮原・川八反田	熊本市保田窪５丁目、八反田１・２丁目ほか	宮原：縄文後・晩期、八反田：縄文早期
90	宮原Ｅ・Ａ	熊本市黒髪６丁目	
91	ネアＥ上	熊本市黒髪８丁目	縄文
92	菊田Ｅ	熊本市菊田町神内・黒髪７丁目	縄文・弥生土器、土師器、須恵器
93	二宮石浦山宮墓地	熊本市黒髪７丁目	縄文土器、土師器、須恵器
94	長野	熊本市菊田町神内	縄文土器、土師器、須恵器
95	万石本田	熊本市菊田町神内、黒髪８丁目	在石式土器、弥生土器
96	黒髪ケノ原遺跡群	熊本市菊田町神内・黒髪８丁目	縄文・弥生：土師土器、墓群、刀形用漆痕
97	菊田神内遺跡群	熊本市菊田町神内	縄文：曽畑式土器
98	下南部	熊本市下南部２丁目	須恵式墓群
99	牧橋遺跡群	熊本市菊田町上宗田	縄文後晩期集落
100	上田	熊本市上南部町上田	須恵式墓相
101	鳥合石ノ上	熊本市上南部	縄文晩期
102	神馬	熊本市貝塚町上西原	縄文早期、弥生：墓相
103	貝塚遺跡群	熊本市貝塚	縄文・中世：石仏神祠天文18年銘
104	長泉地	熊本市長嶺南区原敷	弥生・中・古世：須恵式墓相、鏡文・鉄剣・正徳の紀年銘
105	八反田遺跡群	熊本市貝塚町八反田	縄文後・晩期；土錘
106	南小出	熊本市御領	旧石器：ナイフ型石器

第Ⅲ章　調査の方法と経過

第１節　調査の方法

調査箇所は警衛所の建設予定地及び配管等の埋設予定地である。工事により掘削の及ぶ範囲のみを調査対象区とした。調査の中心は警衛所及びその付帯施設箇所とし、対象面積約114㎡である。配管の埋設地は調査工程上部分的なトレンチ調査にとどめた。

調査ではまず、表土剥ぎ後精査を行った後、任意にグリッドの設定を行った。また、基準点も任意に設定した。基準点は、工事用の測量点を利用して基準点の座標及び標高を押さえることができた。グリッドを設定するに際し、中心点から東西南北方向に杭を周壁に打ち、調査区を４分割した。それぞれのグリッドの呼称として中心点より北西側、北東側、南西側、南東側のそれぞれＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄグリッドとした。

その後、包含層を手掘りで５ cmほど下げながら、遺物を抽出しながら作業を進めた。包含層でも遺物がまばらな状態では層ごとグリッドで取り上げた。遺物がやや集中してきた時点で一点ごと基準点をもとにトランシットまたは、光波測距儀などで取り上げた。

遺構は当初Ｓ（遺構）番号を付し、整理の段階で遺構の種類に応じた番号を振ることとした。ちなみにここではＳ－01～03が遺構番号であり、種類に応じて竪穴住居跡をSIとしSI－01とSI－02があり、土器の集中区をSX－01としている。

遺構は床面近くの土器のみを残し、その規模に応じて、10分の１もしくは20分の１の実測図を作成した。土層断面図は20分の１で作成した。

試掘坑は配管予定地に任意に３箇所設定し、手掘りで掘削した。スコップによる荒掘りの後包含層に到達した時点で移植ごてにより丹念に掘り下げた。

第２節　基本層序

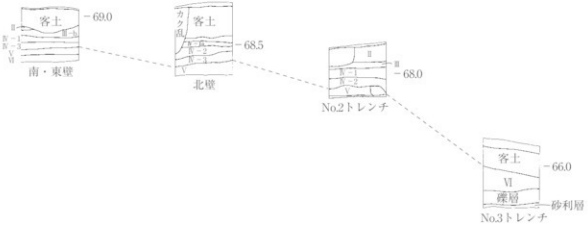
本遺跡では、基本層序を周壁の土層断面図から以下のように設定した。各地点の柱状模式図は下図のとおりである。

０層：客土層（部分的であるが、厚く盛られている所もある）

Ⅰ層：褐色粘質土（旧表土若しくは耕作土）

Ⅱ層：褐色粘質土

Ⅲ層：暗褐色粘質土



第２図　土層模式図

Ⅳ－１層：にぶい黄褐色粘質土、（しまりがない。黄褐色粒混入）
Ⅳ－１ａ層：黒褐色粘質土
Ⅳ－２層：灰黄色粘質土（Ⅳ－１層よりややしまる。黄褐色粒混入）
Ⅳ－３層：灰黄色粘質土（Ⅳ－２層よりしまる。黄褐色粒は少ない）
Ⅴ層：暗褐色粘質土、無遺物層
Ⅵ層：ローム層

第３節　調査の経過

調査は平成15年１月14日から開始した。確認調査結果をもとに遺物包含層の上面まで重機により表土剥ぎを行った。１月15日から作業員を入れて本格的に掘削を開始した。精査して包含層上面の状況を確認した。ごみ穴等の撹乱がかなり大きく開けられていたため、予想外に調査面積が減ることとなった。特に調査区の南側に空けられていた穴は大きく重機で開けられたもののようで重機の爪あとらしき跡が確認できた。

包含層を徐々に掘削しながら、遺構の確認に努めたが、わずかに遺物の多寡に応じて遺構の設定をしてみるものの遺構はなかなか確認できなかった。

１月28日には、SX －01を北東側周壁で確認した。これは遺物が集中するもので、当初は住居跡と想定していたが、調査を進めると土器の集中箇所であるのが分かった。遺物は実測し、取り上げた。

その後も包含層を徐々に掘り下げていたところ、２月４日になってSI －01を検出した。この遺構は、確認調査トレンチにかかっていた。精査を重ね方形プランであるのを確認した。弥生時代の遺物が覆土中に含まれていたことから弥生時代の住居跡であろうと想定したが、床面直上になると縄文土器の小片のみとなり時期の確定が困難であった。床面のよく締まった硬化面、炉跡などを検出し、二本柱であるのを確認し、２月13日完掘した。

その後、遺物の出土する間だけは掘り下げたが新たな遺構は確認できなかった。

一方、トレンチ調査の方は、３箇所設定した。２月10日から人を配置し、それぞれスコップで包含層上面まで掘り下げた。その後包含層は移植ゴテによる掘削を行った。

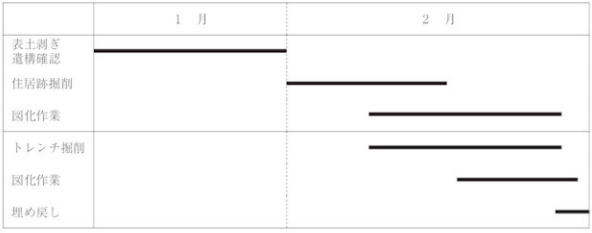
２月13日にはNo.2トレンチの床面に硬化面を検出したので、東側に拡張した。幅１ｍほどのため十分確認できなかったものの、SI-02を確認した。14日に図面、写真を撮り完掘した。

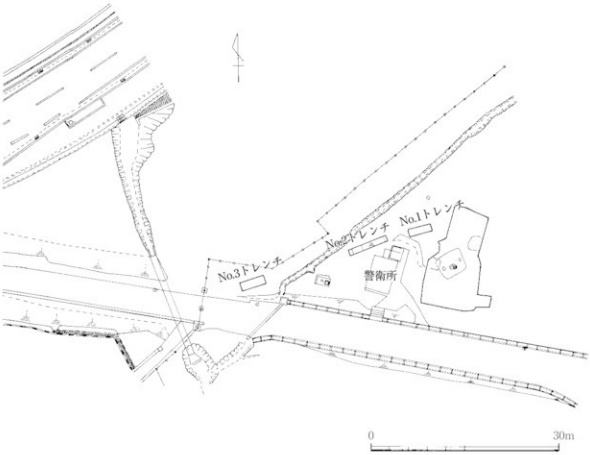
全体の清掃を行い、全体の写真撮影を行ったのち、発掘作業は終了した。

２月14日の午後にはトレンチの埋め戻しを人力で行った。埋める土が不足した。

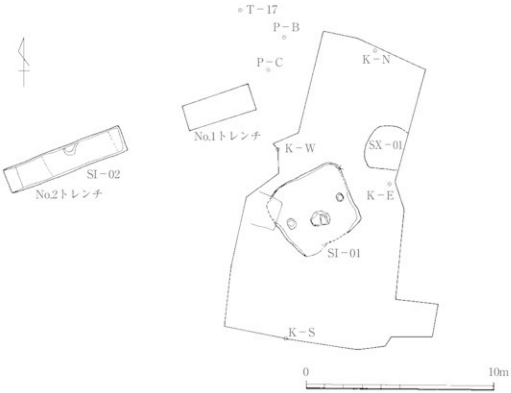
２月17、18日には、重機により調査区全体の埋め戻しを行い、終了した。

第２表　調査工程表





第３図　調査区位置図



第４図　遺構配置図

第Ⅳ章　調査の成果

第１節　遺構

SI －01（第５図）

調査区ほぼ中央で検出した。方形に近いプランで南北410×東西370cm を測る。検出面はⅣ－２層下位で、西側にかけて落ち込む緩斜面にあたる。その為、東側の周壁は深さ約30cm で残りが良い。床面において硬化面、炉址、柱穴が確認できた。炉址は中央より若干、北よりで検出した。炭化物が集中する部分を囲むように炭化物を少量含む粘質土が広がる。柱穴はコーナーでは認められず、中央の東西周壁側に位置する２本柱から成る。柱痕は明瞭で、pit －１の深さ約45cm、pit －２が深さ約60cm を測る。また、pit －２の柱痕は若干、斜めである。

硬化面を最終的に剥ぎ取った結果、厚さ約10cm の６層は炉床下付近で窪むことを確認した。

遺物はそれ程、出土せず床面においてわずかに浮いたものと直上の小破片が出土している。

SI －02（第６図）

トレンチ No.２において確認した。プランはトレンチの為、不明である。幅は東西380cm を測る。中央よりやや西側に炭化物が集中することから炉址と考えられる。硬化面は埋土に比べ非常に固いが、西側ではそのような固くしまった層は確認されなかった。ただし、北壁の断面ではややしまりのある２′層が観察される。柱穴は確認できる部分が限られることから検出できなかった。

遺物は小破片のみで、唯一石庖丁が床面よりわずかに浮いた位置で出土している。

SX －01（第７図）

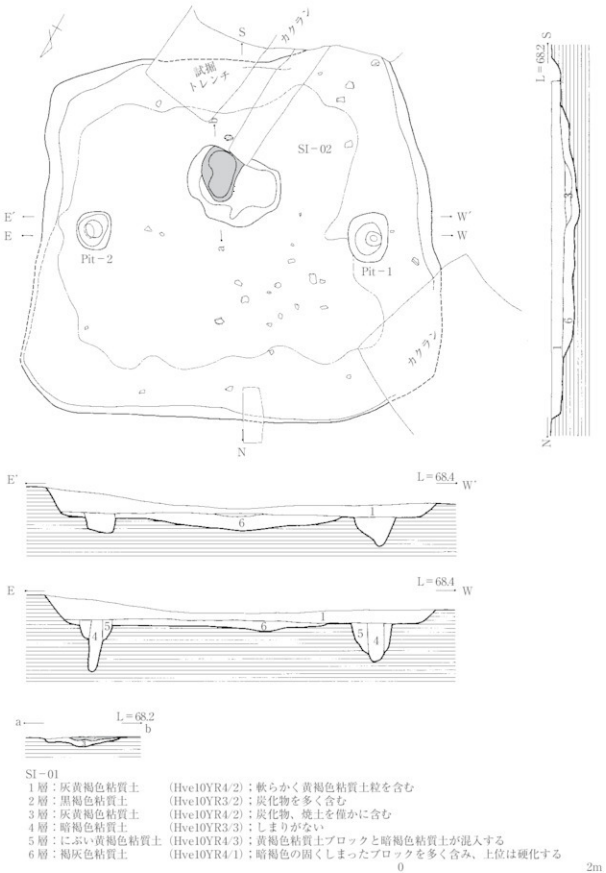
Ｂ区東壁側に遺物が集中する自然の堆積層の可能性が高い。調査区において最も遺物が集中することから当初、遺構の可能性を考えていたが、トレンチにより土層を確認したところ土質が包含層と酷似することと緩やかな立ちあがりがわかる。

第２節　遺物

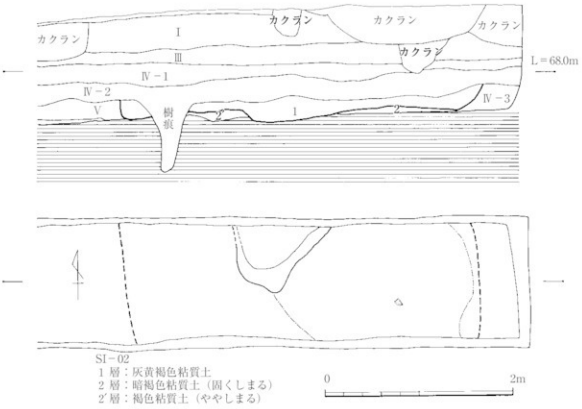
今回の調査で出土した遺物は小破片が多く、数量が少ないことからここでは分類は行っていない。各時期の遺物が混入する包含層が主体である。器種と時期については破片であったこともあり、判る範囲内で図に反映したつもりである。しかしながら、スペースの関係状異なるところもある。掲載する遺物は弥生土器、数点の他は縄文後期の黒色磨研系土器にあたる鳥井原式土器から晩期の黒川式並行段階の土器である。

説明の前に、熊本県での縄文後晩期における型式の変遷観についての研究史を概観したい。後晩期における型式の変遷観は複数の研究がなされ、乙益重隆氏、賀川光夫氏、島津義昭氏、坪井清足氏、富田紘一氏、前川威洋氏、水之江和同氏など詳細を述べているが見解は一致しないのが現状である。後期後半から晩期における富田紘一氏と島津義昭氏の変遷案によれば、太郎迫式―三万田式―鳥井原式―御領式―天城式―古閑式―黒川式―山ノ寺式―夜臼式の流れを想定している。また後期と晩期の境を御領式と天城式の間とするが定かではない。古閑式に関して島津氏と清田氏は２型式に分類が可能であることを指摘しており、「ワクド石遺跡」（熊本県文化財調査報告書144集）では古閑新式を黒川式としている。最近では「鵜羽田遺跡」（熊本県文化財調査報告書168集）においても後晩期について触れられている。

次に縄文後期後半の各型式について簡単に触れたい。三万田式土器は菊池郡泗水町の三万田遺跡が標式とされる。いわゆる黒色磨研系土器の初現にあたり、光沢をもつものが多い。磨消縄文技法は消える。細線の羽状文が特徴的である。鳥井原式土器は熊本市健軍町の鳥井原遺跡が標式となる。口縁の凹線文は鋭い稜を作り出す。細線羽状文は細長くなる。丁寧なミガキ技法が多い。御領式土器は下益城郡城南町の御領貝塚出土の土器を標式として名付けられ、九州の縄文土器研究の基礎となった型式である。文様帯は基本的に限られ、凹線と凹線に突帯状の盛り


S
カクラン
試掘トレンチ
SI－02
E′
E
W′
W
Pit－2
Pit－1
a
カクラン
N
S
L＝68.2
N
E′
L＝68.4
W′
6
1
E
L＝68.4
W
1
6
4
5
5
4
a
L＝68.2
b
SI－01
1層：灰黄褐色粘質土　(Hve10YR4/2)；軟らかく黄褐色粘質土粒を含む
2層：黒褐色粘質土　(Hve10YR3/2)；炭化物を多く含む
3層：灰黄褐色粘質土　(Hve10YR4/2)；炭化物、焼土を僅かに含む
4層：暗褐色粘質土　(Hve10YR3/3)；しまりがない
5層：にぶい黄褐色粘質土　(Hve10YR4/3)；黄褐色粘質土ブロックと暗褐色粘質土が混入する
6層：褐灰色粘質土　(Hve10YR4/1)；暗褐色の固くしまったブロックを多く含み、上位は硬化する
0
2m

第５図　SI－01実測図



第６図　SI －02実測図（No.２トレンチ内）

第７図　SX －01実測図

上がりを作り出す。頸部から胴部の屈曲部は鳥井原式に比べ緩やかになる。晩期前半の土器型式である天城式は菊池市天城遺跡が標式遺跡である。深鉢口縁部は３本以上の沈線文が粗雑に引かれ、胎土口縁部には１条に限られる。古閑式土器は上益城郡益城町の古閑遺跡を標式とする。全体のつくりは粗雑化が進む。深鉢の口縁部は貝殻条痕文を施す。黒色研磨の技法は深鉢にはみられない。黒川式土器は鹿児島、宮崎地方の型式で、熊本においてこの時期の良好な遺跡は知られていない。黒川式の特徴は器面調整や胎土において深鉢と浅鉢の格差が大きくなる。

今回、「ワクド石遺跡」・「鶴羽田遺跡」の報告書を参考として、第３・４表出土遺物観察表の備考欄に型式を記載する。

(1) SI －01・02（第８図－１～６、９図－７）

SI －01から出土した遺物は少量であり、上層の埋土は包含層（Ⅳ－２層）との境が明瞭でなかった為、床面直上もしくは床面のレベルに近い遺物を選んだ。

第８図－１は刻目を施される粘土帯が完結することから、刻目のある突起を有する深鉢とみられる。類似する例で、礫石原遺跡出土のくびれを有す深鉢がある。この土器は口縁直下に押点を付し垂下線と弧線を巡らせ、押点下の肩部に刻み目を有す粘土帯が貼り付けられる。この刻目突起直上の沈線は垂下線と思われる。胎土は粗い。２は口縁部まで直行するタイプで下部に弱い屈曲がみられる。３は条痕が施され、直行する口縁部である。４は屈曲部のある胴部であり、外面は黒色に研磨される。５は胴部上半が外湾し、頸部と口縁部が一体化する浅鉢である。口縁上面は段がみられ、胴部との境は明瞭である。外面と内面の口縁端部にはミガキが施される。６は底部でわずかな上げ底を呈する。胎土は粗い。

SI －02出土の第９図－７は砂岩製の石庖丁である。約半分が欠けるが、背部は直線で肩は尖り、刃部が半円形を呈する。また刃部を中心として周辺が磨かれる。両刃部ともに擦痕が残る。穿孔部は表裏面から穿孔する。

(2) SX －01（第10図－１～４、11図－５・６）

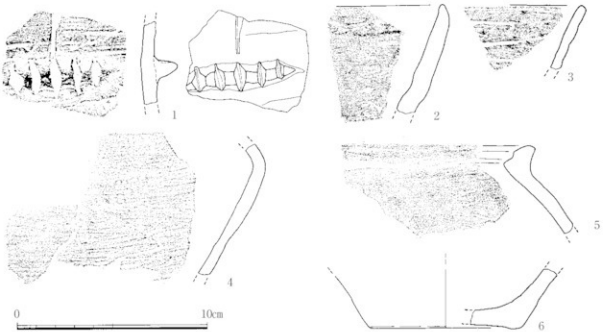
１は胴部が緩やかに膨らむ深鉢で、口縁は直立する。外面には条痕と思われる痕がみられ、内面はケズリが施される。胎土は角閃石が目立ち、やや粗い。２はやや外傾の直行する口縁をもつ深鉢である。外・内面の調整はミガキが施される。３は深鉢の頸部にあたり、外面は黒色に研磨される。胎土は粗い。４は凹線の間に凹点文が施文される浅鉢の口縁部である。凹線と凹線の間にある緩やかな盛り上がりは二股に分かれ上段の凹点文に続くようにもみえる。口縁端部と頸部は明確な稜をもつ。内外面とも丁寧なミガキが認められる。胎土は精選されている。５は胴部より強く屈曲し、外反する口縁をもつ浅鉢である。復原口径は13.6cm を測る。頸部には沈線が施される。内外面ともにミガキの調整がみられるが胎土は粗い。６は遺物の中で最も残存状態が良い浅鉢である。復原口径は34.2cm である。内外面ともにミガキが施される。

(3) 包含層（第12～15図）

(a) 土器

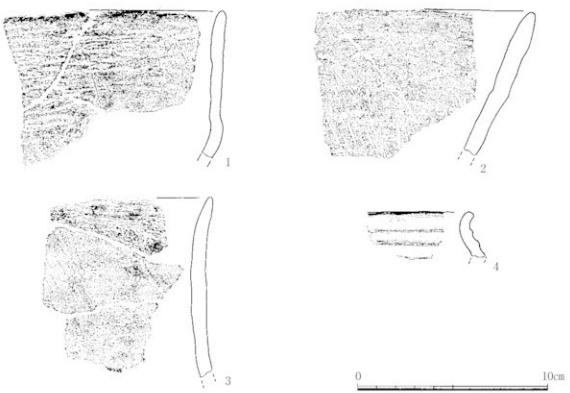
第12図－１～10は凹線が巡る口縁部である。口縁部から頸部にかけて残存する１・２・５・６・９は深鉢とみられるが３・４・７は浅鉢の可能性もある。８は浅鉢と思われる。６は凹線文ではなく、沈線文である。いずれも、口縁部は内傾か直立するようである。１・３の口縁部内外面は丁寧なミガキが施され、胎土も精選されている。９は凹線が深く、稜を作り出している。

以下の第13図は深鉢である。11は貝殻条痕文が施され、沈線文に似せる口縁である。12は沈線が残る。13は直行する口縁部で端部はわずかに肥厚する。外面には横方向に走る貝殻条痕が施される。頸部から口縁にかけて開くタイプには14･15･18･19･20･25がある。これらの内面はすべてミガキが認められ、18･19･20･25は外面でも観察される。25は復原口径31.6cm を測る。16・17は直行する口縁部である。17の外面調整は縦方向の貝殻条痕がみられ、端部付近はナデ消しが施される。21～23は直行する口縁部で外傾するタイプである。24は胴部が膨らむようで

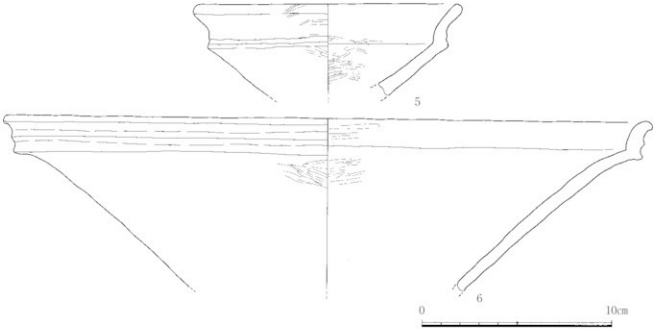


第８図　SI－01出土遺物実測図

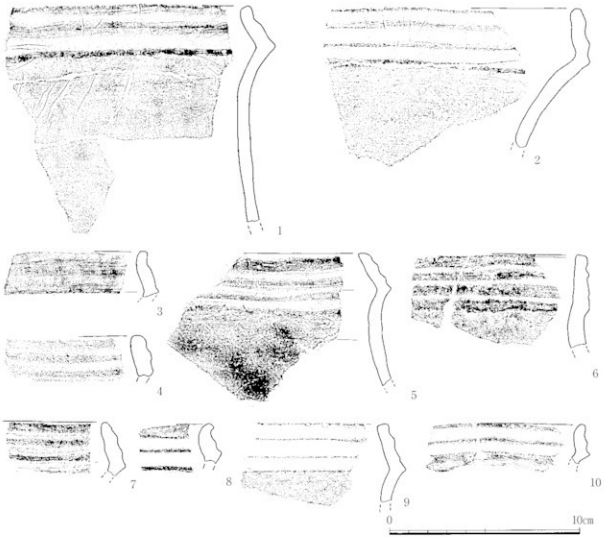
第９図　SI－02出土遺物実測図



第10図　SX－01出土遺物実測図（１）



第11図　SX－01出土遺物実測図（2）



第12図　包含層出土遺物実測図（1）

ある。胎土が精選されているものは11・13・22である。

第14図－26～47は浅鉢と考えられる。26～30は凹線が口縁部に巡り、内外面ともミガキが施される。特に26・29は丁寧である。27･28･30は内傾し26～29の口縁端部は屈曲する。26･27の凹線の間は突状に盛り上がる。26～28の胎土は緻密であり、精選されているものとみられる。31･32は沈線が施され、口縁部の幅は短い。33～35は屈曲部より外湾する頸部と立ちあがる短い口縁部の形態である。35の口縁部は二条の沈線が認められるが、33・34は二条か一条かは不鮮明である。35の頸部は強く外湾し、口縁との境に稜を作り出している。38は口縁端部に突起飾りが付き、内面に沈線が施される。42～45は非常に短い口縁部の内面に段がつくられ沈線状をなす。外面にも沈線を有し、端部を丸く仕上げる。調整についてみると、内外面ともミガキが施されるのは32～34・40～43・45・46に相当する。外面のみミガキ調整が確認できるのは31・37で、内面のみ認められるものは35・39・44がある。胎土が精選されている35・36・38があり、逆に粗いものは32・37・40・41に分かれる。

48･49は外面に横方向の条痕が確認できる。52の胴部外面は削りが施され、穿孔を有する。第15図－54～56は組織痕が残る胴部である。57～66は底部である。57～62は上げ底を呈する。63～66は平底である。57は上げ底が顕著であり、外面には貝殻条痕が施される。特に、59と62底径が小さい。

67～69は弥生土器である。67の口縁部は逆L字状を呈し、内側への張り出しがわずかにみられる。68は内側に傾く口縁部であり、張り出しがあり、T字状口縁を呈する。69の口縁上面は窪み、Y字状口縁に近い形態である。復原口径は67が21.5cm、68が25.6cm、69が27.4cmを測る。

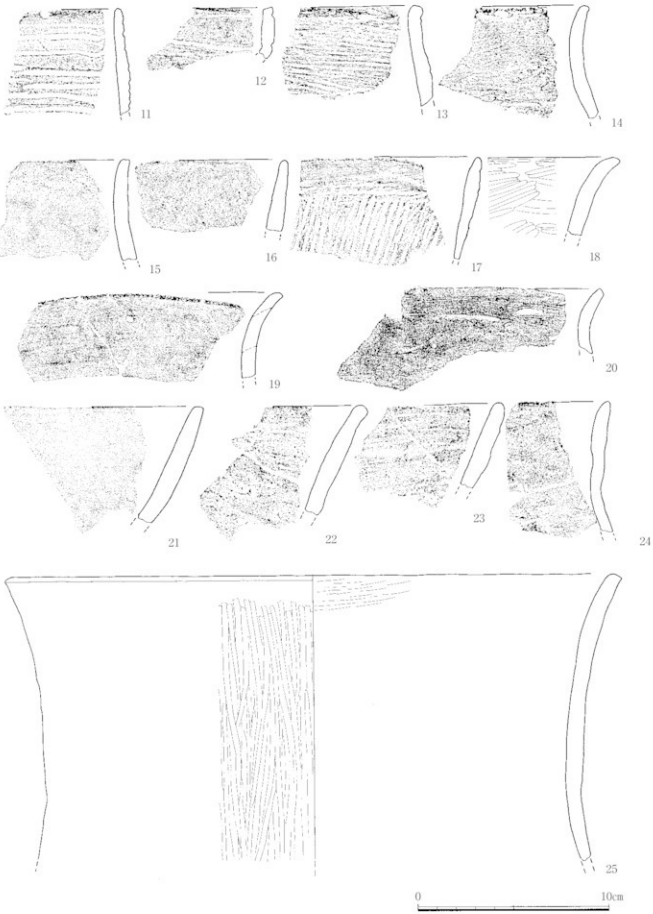
（b）石器（第16図）

石器には石庖丁を除いて、包含層より出土しており、計測値及び観察結果については第５表出土遺物観察表（３）にまとめている。

70は軟玉製の管玉である。穿孔部上下面より穿孔される。71～75は黒曜石製の石鏃である。71は二等辺三角形の形状をもつ石鏃であるが先端部と基部は欠損している。75は全体の形状が二等辺三角形をしている凹基式の石鏃である。72は正三角形に近い形状を呈する凹基式の石鏃で、両側辺は外湾しながら先端に続く。73は凹基式の石鏃であるが上位が欠損している。側辺は外湾しながら先端に続くものとみられ、その最大幅は中位にくる。二つの脚部は外側に突き出した形ではなく、内側に向かっている。74は石鏃の未製品と考えられる。76は安山岩製の石鏃であり、基部はわずかに凹む。

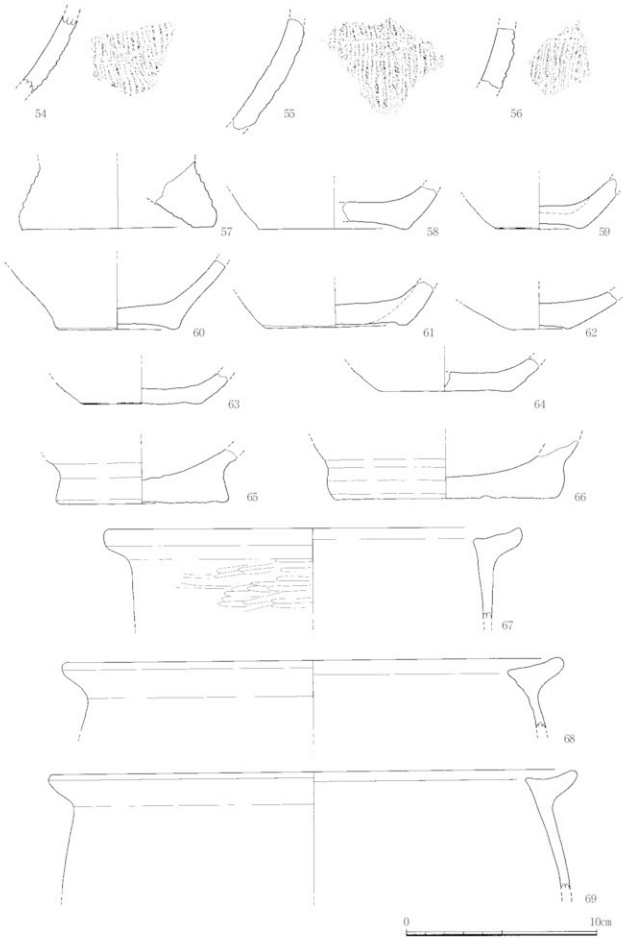
77・80・82・83は石核である。全体の形状はサイコロ状の多面体をしている。剥離作業面を次々に変えているようであり、外側より中心部に向かう剥離が多いようである。

84は安山岩製の石匙である。片側の側面には素材面がみられ、もう一方の側面に刃部が認められる。基部には剥離が残り、つまみ部を作り出している。刃部は複数の剥離が確認できる。85は軟質の安山岩製の打製石斧で片側の側辺部分が欠損している。両側面に刃部、基部に剥離が認められる。86・87は磨石と考えられる。表裏両面ともに磨り面が認められる。

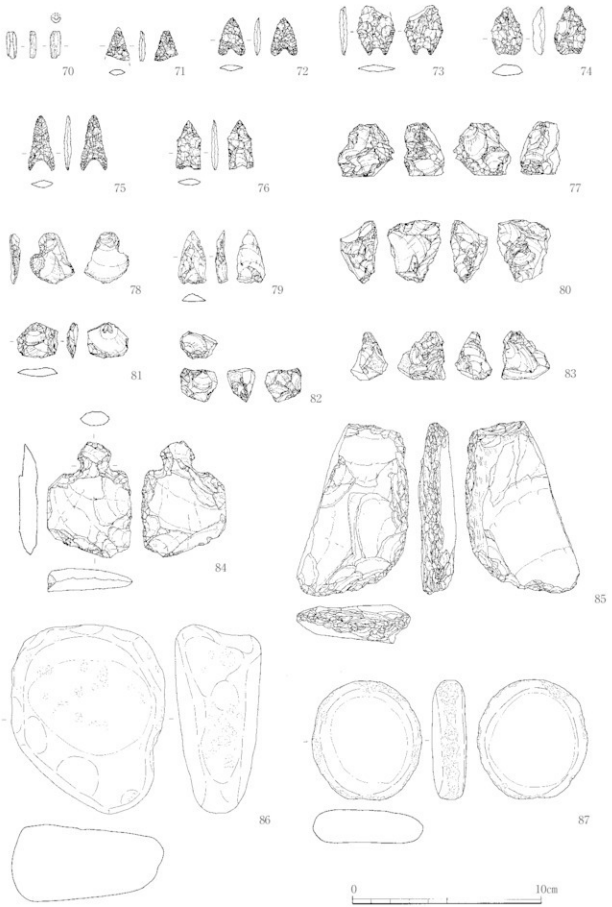


第13図　包含層出土遺物実測図（2）

第14図　包含層出土遺物実測図（3）



第15図　包含層出土遺物実測図（４）



第16図　包含層出土遺物実測図（5）

第Ⅴ章　まとめ

第１節　遺物について

今回の調査で出土した遺物は主に包含層に伴うもので、各時期の遺物が混入する。縄文後晩期（鳥井原・御領・天城・古閑・黒川式）、弥生中期（黒髪式）の時期がみられる。遺物量は石器も含め、調査区は僅かな面積にもかかわらず、多い。注目される遺物として、SI －01出土の遺物である第８図－１は刻目のある突起を有する深鉢とみられる。礫石原遺跡出土のくびれを有す深鉢は、口縁直下に押点を付し垂下線と弧線を巡らせ、押点下の肩部に刻み目を有す粘土帯が貼り付けられる。１の刻目突起直上の沈線はこの垂下線と思われる。この土器は弧線文が滋賀里式系の文様の影響そして刻目突起は刻目突帯につながる要素と考えられている。型式は礫石原式土器が設定されており、黒川式並行期とされる。

第２節　遺構について

調査区ほぼ中央で検出されたSI －01は方形に近いプランで南北410×東西370cmを測り、中央の東西周壁側に位置する２本柱から成る。床面付近から出土する遺物は時期を決定するにはそれ程多くないが、遺物をみる限り縄文晩期（黒川式並行期）である。

県内の方形の竪穴住居跡は黒色磨研土器様式の時期で22基があり、刻目突帯文土器様式の時期には４基中３基と、検出例は少ない。黒川式に限られるのは中堂遺跡の１例のみの２基であり、刻目突帯文土器様式の時期は五丁中原遺跡、柏木谷遺跡、中堂遺跡などが挙げられる。

以上のように黒川式並行期の竪穴住居跡の類例は少ない。また、２本柱の竪穴住居跡は晩期にみられないことなどもあり、位置付けは現状では難しく、今後の調査事例に期待したい。

SI －02はトレンチNo.2において確認される。プランは不明であるが幅は東西380cmを測る。遺物は小破片のみで石庖丁が床面より若干、浮いた位置で出土している。時期については石庖丁の形状から判断すれば、弥生時代中期の可能性が考えられる。

第３節　遺跡について

今回の調査では竪穴住居跡２基を確認した。調査区は頂上からの緩斜面にあたり、南西側の小さい谷に向かって下がる地形に位置する。頂上の斜面は大きく削平され、その客土で調査区付近は整地される。包含層出土の遺物は小破片が多数であり、時期は縄文時代後晩期（鳥井原・御領・天城・古閑・黒川式）、弥生時代中期（黒髪式）が混入する。斜面地であることから、上部より流れ込んだものと判断した。立田山周辺には縄文時代早期～弥生時代にかけての遺跡が多く見受けられるように、本遺跡も岩倉山を背景として緩斜面に各時期の集落が営まれていたものと推測できる。

主要参考文献

小林久雄「九州の縄文土器」『人類学先史学講座』第11巻　1941
河口貞徳「黒川洞窟発掘報告」『鹿児島県考古学会紀要』1952
賀川光夫「縄文文化の発展と地域性　九州東南部」『日本の考古学』1965
坪井清足「御領貝塚の発掘調査」『城南町史』1965
乙益重隆・前川威洋「縄文後期文化　九州」『新版考古学講座』第３巻　1969
古田正隆「礫石原遺跡－縄文晩期農耕生産文化の姿相－」百人委員会　1977
濱昭志編「古保山・古閑・天城」熊本県文化財調査報告　第76集　1980
横口逵也「石崎曲り田遺跡Ⅲ」福岡県教育委員会　1985
島津義昭「黒色磨研土器様式」『縄文土器大観』第４巻　1989
水ノ江和同「西平式土器に関する諸問題－福岡県柴城町所在松丸井原出土縄文土器の位置づけ－」『九州考古学』第67号　1992
江本　直「柏木谷遺跡」熊本県文化財調査報告　第134集　1993
和田好史「中堂遺跡」人吉市教育委員会　1993
古森政次郎「ワクド石遺跡」熊本県文化財調査報告第144集　1994
島津義昭・古城史雄「沖松遺跡」熊本県文化財調査報告　第154集　1994
金田一精「五丁中原遺跡」発掘調査概要報告書熊本市教育委員会　1997
清田純一「縄文・後晩期土器考－中九州の縄文後・晩期土器とその赤彩型式について－」肥後考古学会第11号　1998
坂田和弘「嶋羽田遺跡」熊本県文化財調査報告　第168集　1998
野田信義・浜田彰久「古閑北遺跡」熊本県文化財調査報告　第184集　1999
竹田宏司「太郎迫遺跡・妙見遺跡」熊本県文化財調査報告　第186集　1999
池田朋生「九州の縄文住居」九州縄文研究会　2000
中村幸弘「石の本遺跡群Ⅴ」熊本県文化財調査報告第205集　2002

第３表　出土遺物観察表（１）

図版 No	器種	部　分	復原径	残存高	底径	色　調	胎土の特徴	焼成	調　整	備　考
第８図－１	深鉢	胴部上位		4.3		（内）褐灰色（Hue10YR5/1）（外）にぶい黄橙（Hue10YR6/4）	角閃石　石英　砂粒を含み粗い	普通		
第８図－２		口縁部		5.7		（内）橙（Hue7.5YR6/6）（外）オリーブ黄（Hue5Y6/4）	角閃石　石英　長石	普通	（外）ミガキ	
第８図－３		口縁部		3.4		（内）にぶい橙（Hue7.5YR6/4）（外）橙（Hue5YR6/6）	石英　砂粒を含む	普通	（内）ヨコナデ（外）条痕のちナデ	
第８図－４	深鉢	胴部		6.8		（内）にぶい黄橙（Hue10YR7/3）（外）暗褐色（Hue10YR3/3）	角閃石　長石　砂粒	普通	（内）（外）ミガキ	
第８図－５	浅鉢	口縁～頸部下位	25.4	4.6		（内）灰黄褐（Hue10YR4/2）（外）灰黄褐色（Hue10YR5/2）	精選	やや良好	（内）口縁端部ミガキ　（外）ミガキ	黒
第８図－６		底部		3.1	8	（内）にぶい黄橙（Hue10YR7/4）（外）にぶい橙（Hue7.5YR7/4）	粗い	普通	（内）（外）ナデ	
第10図－１	深鉢	口縁部		7.7		（内）黄褐（Hue2.5Y5/3）（外）褐（Hue7.5YR4/3）	角閃石　石英が目立つ	普通	（内）ナデ（外）ナデ	古ラス状付着
第10図－２	鉢	口縁部		7.6		（内）にぶい黄橙（Hue10YR7/4）（外）暗褐色（Hue10YR3/3）	精選	良好	（内）ナデ（外）ミガキ	
第10図－３		口縁部		9.4		（内）にぶい黄橙（Hue10YR7/3）（外）褐灰（Hue10YR5/1）	角閃石　雲母　砂粒を含み粗い	不良	（内）ナデ（外）ミガキ	
第10図－４	浅鉢	口縁部	22.6	3		（内）にぶい黄橙（Hue10YR6/4）（外）灰黄褐（Hue10YR5/2）	精選	普通	（内）（外）ミガキ	凹点あり　鳥
第11図－５	浅鉢	口縁部	13.6			（内）（外）にぶい黄橙（Hue10YR7/4）	角閃石　石英　長石を含み粗い	普通	（内）ミガキ（外）ミガキ	古
第11図－６	浅鉢	口縁～胴部	34.2	9		（内）（外）にぶい黄橙（Hue10YR7/4）	角閃石　砂粒	普通	（内）（外）ミガキ	
第12図－１	深鉢	口縁部	30.4	11.4		（内）（外）にぶい黄橙（Hue10YR7/4）	精選	普通	（内）（外）ミガキ	鳥
第12図－２	深鉢	口縁部	42	7.4		（内）（外）にぶい黄橙（Hue10YR6/3）	角閃石　雲母	普通	（内）（外）ミガキ	鳥・鋼
第12図－３	深鉢	口縁部	31.8	2.4		（内）（外）にぶい黄（Hue2.5Y6/4）	精選	良好	（内）（外）丁寧なミガキ	鳥？
第12図－４	深鉢	口縁部		2.1		（内）（外）浅黄橙色（Hue10YR8/3）	角閃石　砂粒	普通	（内）ナデ	鳥・鋼
第12図－５	深鉢	口縁部	37.6	7		（内）（外）黄橙色（Hue10YR8/6）	石英	普通	（内）ナデ（外）ミガキ	鋼・天
第12図－６	深鉢	口縁部		4.9		（内）灰黄褐（Hue10YR5/2）（外）浅黄橙（Hue10YR8/4）	角閃石目立つ	普通	（内）工具によるナデ（外）ナデ	天
第12図－７	深鉢	口縁部		2.8		（内）（外）浅黄（Hue5Y7/4）	角閃石　砂粒	やや不良		鳥・鋼
第12図－８	浅鉢	口縁部		2.1		（内）（外）にぶい黄橙（Hue10YR7/4）	角閃石　石英　長石	不良	（内）ナデ（外）ナデ	鳥
第12図－９	深鉢	口縁部		4.1		（内）灰黄褐色（Hue10YR4/2）（外）にぶい黄褐（Hue10YR6/3）	角閃石　雲母　砂粒	不良	（内）（外）ナデ	鋼
第12図－10		口縁部		2.1		（内）にぶい黄橙（Hue10YR7/4）（外）にぶい橙（Hue7.5YR7/3）	砂粒　角閃石	普通	（内）（外）ミガキ	
第13図－11	深鉢	口縁部		5.6		（内）黄褐色（Hue10YR5/6）（外）灰黄褐色（Hue10YR4/2）	精選	良好	（内）（外）ナデ	古
第13図－12	深鉢	口縁部		2.7		（内）（外）浅黄橙色（Hue10YR8/4）	角閃石　石英	普通	（内）（外）ミガキ	天？
第13図－13		口縁部		5.3		（内）灰黄褐（Hue10YR6/2）（外）浅黄橙（Hue10YR8/3）	精選	普通	（内）条痕のちナデ（外）貝殻条痕	古・黒
第13図－14	深鉢	口縁部		6		（内）（外）灰黄褐色（Hue10YR5/2）	角閃石　石英	普通	（内）ミガキ（外）ナデ	
第13図－15	深鉢	口縁部		5.3		（内）（外）にぶい黄橙（Hue10YR7/3）	角閃石目立つ	普通	（内）（外）ミガキ	
第13図－16		口縁部		3.8		（内）にぶい黄橙（Hue10YR7/4）（外）にぶい黄橙（Hue10YR7/2）	角閃石	良好	（内）（外）ミガキ	
第13図－17	深鉢	口縁部		5.6		（内）明黄褐色（Hue10YR6/6）（外）灰黄褐色（Hue10YR5/2）	角閃石　石英	普通	（内）ナデ（外）貝殻条痕	赤色顔料付着
第13図－18	深鉢	口縁部	34	4.1		（内）にぶい黄褐（Hue10YR5/3）（外）褐灰（Hue10YR4/1）	角閃石　砂粒	普通	（内）（外）ミガキ	
第13図－19	深鉢	口縁部	30	4.5		（内）にぶい黄橙（Hue10YR6/3）（外）にぶい黄橙（Hue10YR7/3）	角閃石が目立つ	普通	（内）（外）ミガキ	
第13図－20	深鉢	口縁部		3.4		（内）にぶい黄橙（Hue7.5YR6/4）（外）にぶい黄橙（Hue10YR6/3）	精選	良好	（内）（外）ミガキ	鳥・鋼
第13図－21	深鉢	口縁部		6.1		（内）（外）にぶい黄褐（Hue10YR5/3）	長石	良好		
第13図－22		口縁部		5.7		（内）（外）にぶい黄橙（Hue10YR7/4）	角閃石　石英　長石	普通	（外）ナデ	古・黒
第13図－23		口縁部		4.5		（内）浅黄（Hue2.5YR7/3）（外）にぶい黄橙（Hue10YR7/4）	小石　砂粒を含み粗い	普通	（内）ナデ（外）ケズリ　ナデ	
第13図－24	深鉢	口縁部		6.9		（内）にぶい黄橙（Hue10YR6/3）（外）にぶい褐（Hue7.5YR5/3）	角閃石が目立ちやや粗い	良好	（内）ナデ（外）ナデ	スス付着
第13図－25	深鉢	口縁～頸部	31.6	15.1		（内）にぶい黄橙（Hue10YR7/4）（外）にぶい橙（Hue7.5YR6/4）	角閃石が多い　長石　砂粒	普通	（内）（外）ミガキ	
第14図－26	浅鉢	口縁部	22.2	2.4		（内）（外）灰黄褐（Hue10YR4/2）	精選	普通	（内）（外）ミガキ	鳥
第14図－27	浅鉢	口縁部		2.2		（内）にぶい黄橙（Hue10YR7/4）（外）にぶい橙（Hue7.5YR6/4）	精選	普通	（内）（外）ミガキ	鳥
第14図－28	浅鉢	口縁部	23.5	3.4		（内）（外）黄灰（Hue2.5Y5/1）	精選	普通		鳥？
第14図－29	浅鉢	口縁部		3		（内）灰黄褐（Hue10YR4/2）（外）にぶい黄褐（Hue10YR5/3）	角閃石　長石	普通	（内）ミガキ（外）丁寧なミガキ	鳥
第14図－30	浅鉢	口縁部		1.8		（内）黒褐（Hue10YR3/2）（外）にぶい黄橙（Hue10YR6/3）	角閃石　石英	普通	（内）ナデ（外）ミガキ	鳥・鋼
第14図－31		口縁部		2.9		（内）橙（Hue7.5YR7/6）（外）橙（Hue5YR6/6）	石英　角閃石	普通	（外）ミガキ	天？
第14図－32	浅鉢	口縁部		1.9		（内）にぶい黄褐（Hue10YR5/3）（外）灰黄褐（Hue10YR4/2）	角閃石　石英　砂粒を含み粗い	不良	（内）（外）ミガキ	天・古
第14図－33	浅鉢	口縁部	17.2	3.7		（内）（外）にぶい黄橙（Hue10YR7/4）	角閃石　石英　長石	良好	（内）（外）ミガキ	鋼・天？
第14図－34	浅鉢	口縁部		3.3		（内）黒褐（Hue10YR3/1）（外）褐灰（Hue10YR4/1）	砂粒を含む	普通	（内）（外）ミガキ	天・古？
第14図－35	浅鉢	口縁部		3.6		（内）（外）黄橙色（Hue10YR8/6）	精選	普通	（内）ミガキ（外）ナデ	天？
第14図－36	浅鉢	口縁部		2.3		（内）にぶい黄橙（Hue10YR7/3）（外）にぶい黄橙（Hue10YR7/4）	精選	普通		
第14図－37	浅鉢	口縁部		3		（内）（外）褐（Hue7.5YR4/3）	角閃石　長石　小石を含み粗い	普通	（外）ミガキ	古
第14図－38		口縁部		2.5		（内）橙（Hue5YR6/8）（外）浅黄橙（Hue10YR8/3）一部橙（Hue5YR6/8）が残る	精選	良好	（内）（外）ナデ	黒
第14図－39	浅鉢	口縁部		2.1		（内）（外）にぶい黄橙（Hue10YR7/4）		良好	（内）ミガキ（外）ナデ	
第14図－40		口縁部		5.5		（内）（外）にぶい赤褐（Hue5YR5/4）	角閃石　長石を含み粗い	普通	（内）ミガキ（外）ナデ　ミガキ	古
第14図－41		口縁部	36～40	2.1		（内）（外）にぶい褐（Hue7.5YR5/3）	角閃石　小石を含み粗い	普通	（内）（外）ミガキ	
第14図－42		口縁部		2.9		（内）灰黄褐（Hue10YR6/2）（外）にぶい黄褐（Hue10YR6/3）	角閃石　石英　長石	普通	（内）（外）ミガキ	古
第14図－43	深鉢	口縁部		4.5		（内）褐灰（Hue2.5Y4/2）（外）褐灰黄（Hue2.5Y5/2）	石英が多い	良好	（内）（外）ミガキ	後期？
第14図－44	浅鉢	口縁部		3.1		（内）（外）灰黄褐（Hue10YR6/2）	砂粒	普通	（内）ミガキ（外）ナデ	古

第４表　出土遺物観察表（２）

図版 No	器種	部　分	復原径	残存高	底径	色　調	胎土の特徴	焼成	調　整	備　考
第14図－45	浅鉢	口縁部		5.5		（内）にぶい黄橙（Hue10YR7/4）（外）にぶい黄褐（Hue10YR5/3）	小石　角閃石	良好	（内）（外）ミガキ	後期
第14図－46	浅鉢？	口縁部		2.6		（内）にぶい黄橙（Hue10YR6/4）（外）にぶい黄橙（Hue10YR6/3）	砂粒	普通	（内）（外）ミガキ	古
第14図－47	浅鉢	口縁部		4.2		（内）（外）にぶい黄橙（Hue10YR7/4）	角閃石　砂粒	良好	（内）（外）ナデ	
第14図－48		口縁部		3.3		（内）にぶい黄橙（Hue10YR7/4）（外）橙（Hue7.5YR7/6）	砂粒	普通	（内　ナデ（外）貝殻条痕	
第14図－49	浅鉢	口縁部		5.7		（内）にぶい黄褐（Hue10YR4/3）（外）にぶい黄褐（Hue10YR5/4）	小石　砂粒	普通	（内）ミガキ（外）条痕	
第14図－50		口縁部		5.5		（内）明黄褐（Hue10YR7/6）	角閃石目立つ	普通	（内）（外）ミガキ	
第14図－51	鉢	口縁部		7.3		（内）淡黄橙（Hue10YR8/4）（外）にぶい黄橙（Hue10YR7/4）	角閃石目立つ	普通	（内）（外）ヨコナデ	
第14図－52	深鉢	口縁部		4.6		（内）にぶい黄橙（Hue10YR7/4）（外）にぶい黄橙（Hue10YR6/4）	砂粒	良好	（内）ミガキ（外）ケズリ	
第14図－53		口縁部		3.1		（内）黒褐色（Hue10YR3/1）（外）淡黄橙（Hue10YR8/3）	砂粒	普通	（内）（外）ナデ	
第15図－54		胴部				（内）にぶい赤褐（Hue5YR4/4）（外）褐（Hue7.5YR4/4）	石英　砂粒	普通	（内）ナデ	組織痕
第15図－55		底部				（内）褐（Hue7.5YR4/3）（外）にぶい赤褐（Hue5YR4/4）	角閃石　石英	良好		組織痕
第15図－56		胴部		3.2		（内）にぶい赤褐（Hue5YR4/4）（外）にぶい褐（Hue7.5YR5/4）	角閃石　石英	良好		組織痕
第15図－57		底部		2.3	10	（内）明黄褐（Hue10YR7/6）（外）橙（Hue7.5YR7/6）	砂粒	良好	（外）貝殻条痕	
第15図－58		底部		2.3	7.8	（内）にぶい黄橙（Hue10YR7/3）（外）橙（Hue7.5YR7/6）	角閃石　砂粒	普通	（内）（外）ミガキ	
第15図－59		底部		2.6	4.7	（内）にぶい黄橙（Hue10YR7/4）（外）橙（Hue7.5YR7/6）	精選	普通		
第15図－60		底部		3.6	6.4	（内）にぶい黄橙（Hue10YR7/3）（外）橙（Hue7.5YR7/6）	角閃石　石英　小石　砂粒を含み粗い	普通	（内）（外）ミガキ	
第15図－61		底部		2.5	7.8	（内）にぶい黄橙（Hue10YR7/2）（外）にぶい黄橙（Hue10YR7/4）	角閃石　小石　砂粒を含み粗い	普通		
第15図－62		底部		1.9	3.1	（内）（外）にぶい黄橙（Hue10YR7/4）	精選	良好	（内）（外）ミガキ	
第15図－63		底部		1.6	6.4	（内）オリーブ黒（Hue5Y3/1）（外）にぶい黄橙（Hue10YR7/4）	砂粒	普通	（内）ナデ	
第15図－64		底部		1.7	6.8	（内）にぶい黄橙（Hue10YR7/3）（外）にぶい黄橙（Hue10YR7/4）	角閃石　砂粒	良好	（内）（外）ナデ	
第15図－65		底部		2.8	9	（内）にぶい橙（Hue7.5YR7/4）（外）橙（Hue7.5YR6/6）	角閃石　石英	良好		
第15図－66		底部		3	14	（内）灰白（Hue10YR8/2）（外）にぶい黄橙（Hue10YR7/3）	角閃石　砂粒	普通	（外）ナデ	
第16図－67	甕	口縁部	21.5	4.9		（内）にぶい橙（Hue7.5YR6/4）（外）にぶい褐（Hue7.5YR5/4）	砂粒	良好	（内）ナデ（外）ミガキ	弥生土器
第16図－68	甕	口縁部	25.6	3.7		（内）（外）にぶい黄橙（Hue10YR7/4）	角閃石　石英　長石	良好	（内）（外）ヨコナデ	弥生土器
第16図－69	甕	口縁部	27.4	6.4		（内）橙（Hue7.5YR6/6）（外）褐（Hue10YR4/4）	小石　砂粒	普通	（内）ヨコナデ	弥生土器

第５表　出土遺物観察表（３）

図版 No	器種	石　材	長さ	幅	厚さ	重量	備　考
第９図－７	石鏃Ｔ	砂岩	6.83	5.35	0.60	43.27	赤黒色
第16図－70	管玉	軟玉	1.42	0.55	0.29	0.25	赤黒色
第16図－71	石鏃	黒曜石	1.57	1.26	0.31	0.48	赤黒色
第16図－72	石鏃	黒曜石	1.96	1.40	0.35	0.70	暗灰色
第16図－73	石鏃	黒曜石	2.58	2.00	0.35	1.63	暗青灰色
第16図－74	石鏃	黒曜石	2.52	1.61	0.60	2.32	赤黒色　不純物を含む　未製品
第16図－75	石鏃	黒曜石	2.86	1.36	0.35	0.85	赤黒色
第16図－76	石鏃	安山岩	2.55	1.28	0.33	1.01	赤黒色
第16図－77	石核	黒曜石	2.79	2.92	1.95	15.47	赤黒色
第16図－78	剥片	黒曜石	2.52	2.37	0.52	2.48	赤黒色
第16図－79	剥片	黒曜石	2.79	1.44	0.57	1.84	赤黒色　不純物を含む
第16図－80	石核	黒曜石	3.50	3.00	2.15	13.99	赤黒色
第16図－81	剥片	黒曜石	1.73	2.05	0.50	1.81	赤黒色
第16図－82	石核	黒曜石	1.86	2.09	1.46	4.53	赤黒色
第16図－83	石核	黒曜石	2.60	2.52	1.64	8.09	赤黒色　不純物を含む
第16図－84	石鏃	安山岩	4.24	6.05	1.02	31.74	
第16図－85	打製石斧	安山岩	9.35	4.96	1.70	104.47	
第16図－86	磨石	?	102.30	8.14	4.62	498.67	
第16図－87	磨石	?	6.37	5.75	1.78	105.95	

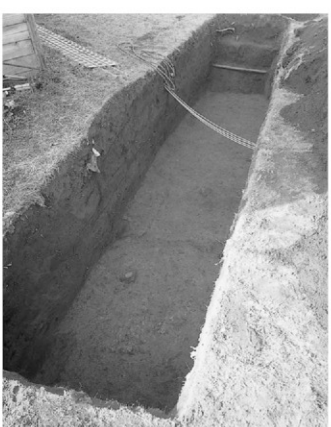
※備考の鳥は鳥井原式、御は御領式、天は天城式、古は古間式、黒は黒川式の省略

図　　版

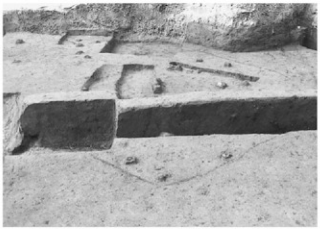
（1）SI－01遺物出土状況

（2）SI－01炉跡・柱穴検出状況

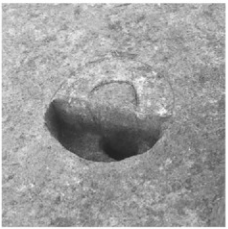
（3）SI－01完掘状況



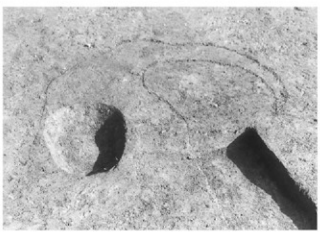
（4）SI－02完掘状況



（5）SI－01検出状況



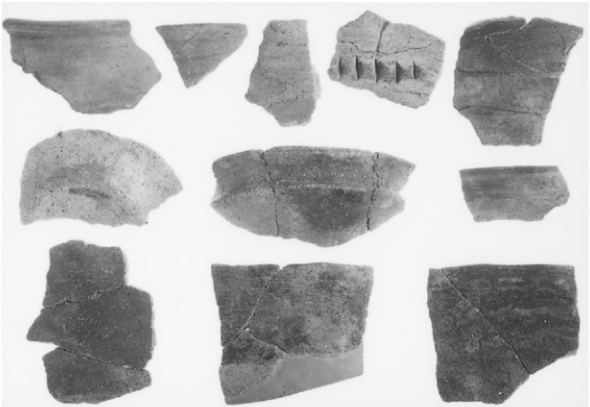
（6）SI－01Pit.2半截状況



（7）SI－01炉跡検出状況

（8）SX－01遺物出土状況

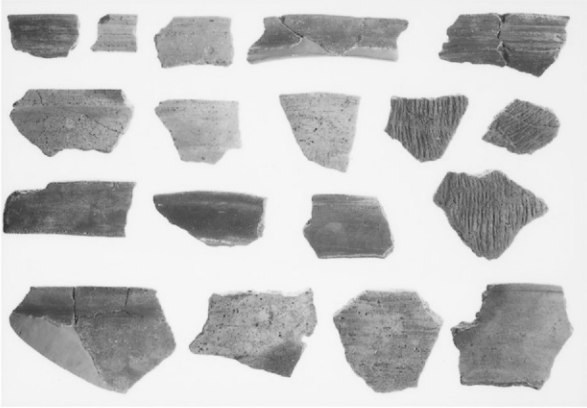
（9）完掘状況（全景）



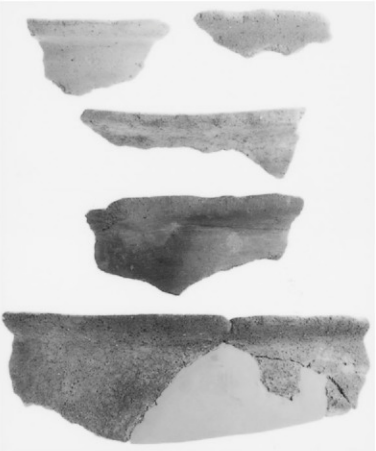
（10）SI －01・SX －01出土遺物

（11）SX －01出土遺物

(12) 包含層出土縄文土器

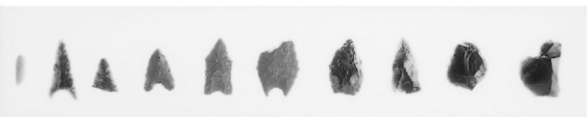


(13) 包含層出土縄文土器

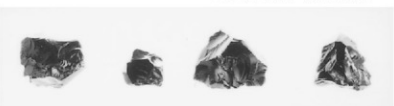


（14）包含層出土弥生土器

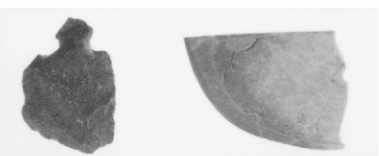
（15）包含層出土縄文土器（底部）



（16）出土石器（石鏃、剥片）



（17）出土石器（石核）



（18）出土石器（石匙・石包丁）

（19）出土石器（打製石斧）

あ と が き

陸上自衛隊北熊本駐屯地警衛所建設に伴う埋蔵文化財調査は期間が限られていたこともあり、あわただしく平成14年度は過ぎ去った感があります。編者としては初めての報告書作成に携わらせて頂き、貴重な経験でありました。しかしながら力量不足であったため、多くの方々にお世話になりました。最後にこの報告書作成にあたり御協力下さった皆様に感謝申し上げます。

木村　雅子	水本寿美子	今村　幸枝	森崎　潔子	山野　孝子	吉本　清子	小山　雅子
桑原佐和子	高濱　悦子	中山　安子	原田　美和	内田　孝子	金子　理恵	川井田昌康
高松　詩織	吉武　章吾	瀬口　智史	宮崎　恵美	井島美佐子	池永　礼奈	中村　衣里
平野美由紀	井島　秀子	井上　裕美	坂本貴美子	宮崎　典子	清水　千郷	浜崎　清子
山田　友子	渡辺いわ子	府内　博子	村田百合子	戸田紀美子	平川恵理子	西村　和美
岡田　基子	村上千万年	川田　喬基	徳永シヅカ	徳本　　静	川添　勝昭	太田　正次
川田　生子	藤木　敏章	藤木　久子	水上　順子	村上　恵子		

報告書抄録

フリガナ	イワクラヤマチュウフクイセキ
書名	岩倉山中腹遺跡
副書名	熊本県熊本市八景水谷２丁目17番１号所在遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第215集
編著者	米村　大
編集機関	熊本県教育庁文化課
所在地	〒862－8609　熊本県熊本市水前寺６丁目18番１号
発行年	2003年

フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
イワクラヤマチュウフクイセキ 岩倉山中腹遺跡	クマモトシハッケイミズタニ 熊本市八景水谷２丁目17番１号	201	086	32° 50′ 27″	129° 14′ 34″	20030114 ～ 20030220	114㎡	陸上自衛隊北熊本駐屯地警衛所建設工事

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特注事項
岩倉山中腹遺跡	集落	縄文 弥生	住居跡　2	縄文土器 弥生土器 石器	

熊本県文化財調査報告　第215集

岩　倉　山　中　腹　遺　跡

平成15年３月31日

編集
発行　熊本県教育委員会
〒862-8570　熊本市水前寺６丁目18番１号

印刷　株式会社啓文社
〒861-3102　熊本県上益城郡嘉島町下六嘉1765

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 215 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。
底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名： 岩倉山中腹遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話： 096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 8 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。
熊本県文化財保護協会
URL：http://www.kumamoto-bunho.jp/